

開催地名：埼玉県鶴ヶ島市	
開催日時	令和元年 11 月 16 日（土） 10：00 ～ 12：00
開催場所	鶴ヶ島市役所
語り部	島田 福男（宮城県仙台市）
参加者	地域住民、安心安全推進課職員 約 100 名
開催経緯	本市は地形が平坦であり、大きな河川や山もなく、比較的災害が少ないまちであり、住民の災害に対する危機意識が低い。また、高齢化に伴い、自主防災組織の役員等の担い手不足のため、自主防災組織の設立が困難な状況にある。そこで、東日本大震災の語り部に経験談や教訓をお話いただくことにより、自主活動組織の意義や役割について認識を深めたい。
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>東日本大震災から 8 年以上が過ぎ、災害の復旧、復興工事もだいぶ進んだ。仙台市に限っていえば、仮設住宅もゼロになり、遅れていた津波の被害を受けた沿岸部も津波避難タワーを建設するなど、着々と工事が進んでいる。</p> <p>（２）災害対応計画策定モデル事業</p> <p>地震というのは、なかなか予知できない。いつ、どこで、どの程度の規模のものが起きるかかということは、誰にも分からない。そのため、前もって準備しておくことが必要である。地震が起きてからはなかなか対応することが難しい。前もってみんなで話し合い、それぞれの地域のルールを決めておかなければ、対応が難しいということである。平時にできないことは、災害時にはなおできない。</p> <p>そのような観点から、私たちの地区では平成 14 年から連合町内会に自主防災組織を作った。そこから活動を続けて、災害対応計画策定モデル事業に取り組み、平成 22 年 4 月に川平地区防災対策連絡協議会を設立した。この協議会設立後は、これまでの防災訓練とは異なり、今まで自分たちが話し合ったことをもとにして、避難所をどうやって開設するか、開設したらどうやって運営していくかということを中心に、こと細かく訓練を実施した。この他、毎年数回実施している研修会や講習会では、カードゲームを使った研修会を行った。主に行ったのは、HUG 避難所運営ゲーム、そして D I G 災害図上訓練等である。</p> <p>（３）震災での気づき</p> <p>ライフラインがストップすると、どういうことになるか。電気が止まれば信号が止まる。照明がなくなって真っ暗になる。また、意外に盲点だったのが電話である。家庭用の電話はほとんど使えない。黒電話のように電話回線に差しこんでいるものは使えるが、一般的な液晶のついたコンセントから電源を取っているものは一切使えなくなる。今は、改良されて、停電になっても何時間かは使えるものが出てきて</p>

いるようだが、当時は全く利用できなかった。では、何が連絡用に一番役に立つか。自転車が一番いいが、自転車でも人を使わなくてはいけない。一番役に立ったのは携帯電話である。今であったらスマートフォンである。これが大変役に立つ。通話がなかなかかかりづらいというのは事実だが、そういったとき、ショートメールが有効だった。電話番号が分かっていたら、字数は限られるが、簡単に要件だけを伝えられる。これは大変役に立った。

また、トイレ用の水の確保にも苦労した。飲料水は意外と何とかなるが、生活用水の確保は、量も多く必要なので大変である。具体的には、近隣の小中学校のプールの水を利用した。

#### (4) 避難所運営マニュアル

震災前、仙台市では一律のものを使用していた。ところが実際の震災では、沿岸部は津波の被害、中心部は帰宅困難者であふれ、私たちのような内陸部は、地すべり、地割れなど、被害状況が地域によって全く違う。一律のマニュアルでは無理だということで、193ある指定避難所それぞれ独自のマニュアルを完成させた。今は、そのマニュアルに従っていろいろ防災訓練が行われている。



開催地より

受講者は自主防災に携わるものが多かったため、身近な課題として熱心に話を聞いてた。この講演会を受け、地域による防災意識醸成や自主防災組織活動の活性化を図っていきたい。